



生活を支えること

寒気ことのほか厳しい毎日が続いておりますが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか？

太平洋側では雨が少なく、空気が乾燥しているためか、インフルエンザが猛威を振るっています。

横浜市においては、2024年12月16日～22日の1医療機関当たりの平均値が横浜市全体で43.15となっており、流行警報発令基準である30.00を大きく上回っています。特に旭区は市内で4番目に多い58.80となっており、蔓延していることが見て取れます。当施設でも例外ではなく、一つのフロアで風邪症状が蔓延しており、インフルエンザ感染者は2名と少ないのですが、他はインフルエンザやコロナの検査をしても陰性となっています。いわゆる風邪が蔓延しており、主治医からはウイルスの増殖を抑え、痰を出しやすくする薬や抗生剤など、症状がある人には薬を処方してもらって対応しています。しかし、体調不良になつている職員もいるため、介護の現場は厳しい状況の中でご利用者の生活を支えています。

また、2025年1月より月曜日～土曜日の14時～16時の時間帯で予約制の面会を開始しました。1日あたり4枠までと制限はありますが、徐々に制限を減らしており、最終的には自由にフロアで面会できる方向にしていきたいと考えております。

生活の場である特養では、介護が必要なご利用者をご家族・地域の皆様と職員が互いに協力して支えあう体制が理想的だと考えています。ご利用者が自分らしく生活できるように、皆で知恵を出し合い、考えるしながらご利用者に寄り添っていくこと。そして、誰もが安心して利用できる介護サービスであり続けるために、目の前にあるニーズに誠実に対応することを大切にしていきたいと願っております。

「主は彼をその病の床で支えらるる。あなたは彼の病む時、その病をこぼりとくいやされる」

詩篇41篇3節

施設長 高原信夫

クリスマス会～ひまわり～

年末にクリスマス会であみだくじ大会をやりました。あみだくじはハズしなしのプレゼント付き♪担当職員が厳選した、ご本人のみならずご家族でも使えそうなギフトをご用意しました。また、虹色ツリーの前で撮影した写真やかわいいお人形も、ギフトと一緒に各ご家庭にお持ち帰りいただきました。

昨年はたくさんのイベントをしました。今年は何をやるか。今から楽しみです。

本年もよろしくお願ひいたします。

ひまわり 木下 順子



第294号

令和7年1月15日発行
(毎月1回15日発行)

責任者:施設長 高原信夫
〒241-0802
横浜市旭区上川井町1988
社会福祉法人
アドベンチスト福祉会
シャローム横浜
☎045-922-7333

編集委員
荒金・石川・石橋

<https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/>



シャローム横浜のピロードモウズイカ

今回は私の好きな植物、ピロードモウズイカについて紹介したいと思います。

ヨーロッパ原産で明治初年、観賞用として渡来し日本全国に広がりました。花や葉は喘息、不眠症、下痢、伝染性の皮膚病や炎症の改善の効用があります。アスファルト舗装の隙間、荒地等に生えており、将来的に大きく育つことから力強い植物です。



花言葉は「臨機応変な態度、人当たりの良い」とのこと。花期の8月から9月が楽しみです。

シャロームには、様々な植物が自生しており、毎日癒しとなり感謝です。今年も感染対策を行いながら、ご利用者と健やかな時間を過ごしていければと思っております。

医務室 課長 中村 牧子

クリスマスディナーと正月祝い膳

12月25日はクリスマスディナーでした。

クリスマスということで、ご馳走をたくさんご用意しました。メニューは、ビーフシチュー、サツマイモとエビのガーリックシュリンプ、スモークサーモンと豆のサラダ、オングラタンスープ、チキンパエリア、ケーキです。



1月1日は祝い膳をご用意しました。

2025年は晴天に恵まれ、素晴らしい正月を迎えることができました。当日はシャローム職員全員で正月祝い膳をご用意しました。祝い膳の献立は、お雑煮、黒豆、栗きんとん、寿かまぼこ、昆布巻き、数の子、海老姿焼き、紅白なます、鶏の三色巻き、ぶりの西京焼き、お煮めです。

今年も栄養課職員一同、食を通して皆様の健康を支えていきますので、よろしくお願いいたします。

栄養課 課長 小寺 秀偉



30年前の時と比べて・・・

30年前の1995年、1月17日の朝5時頃、阪神・淡路大震災を私共は経験した。そこにおいて犠牲者は最終的に5000名を越えた。病院も、消防署もそして市役所も被害を受け、身動きがとれず救助体制に入る事が非常に困難であった。その時、日本人は隣同士の助け合いやボランティアによる民衆の自発的援助の大切さに気づいた。それらの人々により、炊き出しが行われ支援の輪が広がっていったのである。以後、日本においてボランティア活動の大切さが浸透し、次々とボランティア活動の組織化がなされていった。それ故に、その年が日本におけるボランティア元年といわれるようになった所以である。

一方、その同じ年の11月23日、日本において初めてのWindows 95の日本語版が発売され、一気にインターネットが盛んに花開く年ともなっていた。それによって人のコミュニケーション・ツール

第202回 チャプレン 上前 至

も変化し、手紙や写真、電話、地図を見ることも、今やスマートフォンを通して、全て人間の手元で操作され便利になったのである。それ自体は悪い事ではないが、人間同士の心の暖かい交流の手段が閉ざされてしまう危険性もある。この間、電車で障害者が乗ってきたが誰一人、席を譲る人がいなかった。皆、自分のスマホに集中し、側にそうした人がいることに誰も気づかなかったからである。どんなに機械文明が発達しても、人の心の温かさを失ってはいけないと思う。ボランティア活動の本質もそこにあるのではと思うからだ。

「貴方の手に善をなす力があるならば、これをなすべき人になすことを差し控えてはならない」



箴言3章27節